第三章　大衆としての意識的少数者

前章において、三月二十二日運動が、その指導的原則の一つとして、教えるものと教えられるものとの間に相違はないということをあげていたこと、そしてそれはあらかじめ尊重すべき知識を否定することにつながっていて、そのことはきわめて革命的な芽を含んでいたこと、そしてそれは、革命運動の中での指導的前衛の否定を実践するものとなる、といった点について触れた。この章では、どのような形で、五月革命の中で指導的前衛が否定され、大衆に対してどのような姿勢がとられたかを書いてゆくことにする。

ダニエル・ゲランは、大衆と前衛、大衆と意識的少数者との関係は、アナキストによってすら、まだ完全に解決されていない問題であって、それについての最後の言葉はまだ語られていない、とのべているが、三月二十二日運動が提示したものは、ある程度、最終的な結論に近いものではないか、と考えられる。それは三月二十二日運動が独創的であったからともいえるが、前衛と大衆という昔からの問題に、そうしたほぼ最終的な結論をださせるような独創性を三月二十二日運動にもたらしたものは、大衆の生活水準の向上、一般的な教育水準の向上、情報手段の拡大などによって、

大衆の知的水準が従来の諸革命の時期よりも上っていたこと、社会主義諸国に見られる革命の歪曲の事実などによって、前衛党に対する信仰、前衛党神話といったものが打ち破られていたこと、更にいえば特に第二次大戦以降の技術革新と生産力の発展による生活様式の激変の過程で、古くからの権威を支える基盤が崩れ、特に青年層の間で権威に対する従属性が失われ、自ら決定を求める傾向が強くなってきたこと、の三つの大きな条件があったため、と考えられる。

それでは、三月二十二日運動が実践を通じて提示したものは何か、それらは次のように要約することができよう。

一、革命を遂行するには、その方向と手段とを明示する意識的少数者の活動は不可欠である。

二、しかしながら、意識的少数者は、大衆支配あるいは大衆蔑視につながる指導的役割を果すものでは決してない。

三、意識的少数者は、行動を通じて、単に模範を示すものである。意識的少数者のなすべきことは、行動を通じて、現在の社会の支配構造、抑圧構造を大衆に暴露すること、現在の社会とは別な社会を建設することが可能であることを大衆に示すことである。

四、そうした意識的少数者の行動は、前衛としての英雄主義、理想社会をつくるための、あるいは大衆のための犠牲的な献身という性質のものではなく、それが単に自分の利益になると感じたものの行動、あるいは単にそうしないではいられないと感じたものの行動であって、同じ利害関係に立っている大衆と手を結ぼうとする行動にすぎない。

五、意識的少数者はあくまでも大衆の一員である。運動体内部での決定は、直接民主主義的な大衆討議による。

六、革命そのものよりも、自己の属する組織の維持拡大を重視する、党派性は排除しなくてはならない。党派性は、現実を具体的に、科学的に考えることで排除することができる。

三月二十二運動が実践を通じて提示したものは、以上のようなものであったと考えられるが、それらをもっと具体的にのべ、その意義に触れる前に、前提として、何が問題なのか、いうまでもないことであるが、一応簡潔にふりかえっておきたい。

現在の支配体制を倒して階級のない社会を建設するという革命運動を進めてゆく上で、大別していえば二つの考え方がある。

一つは、ある革命的プログラムをかかげる政治的集団、つまりいわゆる前衛党を中心にして、その支持者を増やし、その影響力、支配力を拡大してゆきながら権力を奪取しようとする方法で、この場合は、大衆を指導下におくものとしか見ていないし、大衆の自発的な能力を信頼せず、目的意識を持った少数の指導的前衛の指導なしには、革命は行ないえないし、勝つこともできない、という認識がある。

もう一つは、第一の考え方に対立し、それは結局、支配者の交替に終わると見るもので、革命は抑圧されている大衆自身による仕事で、大衆自身による以外に達成できないし、意識的少数者はそれを補佐するにすぎない、という考え方である。バクーニンは、意識的前衛は、大衆自身による解

放を援助する産科医にすぎない、とのべているが、ヴォーリンは、この考え方をもっと明確な形で表現している。

いかなる党、政治的あるいはイデオロギー的集団も、勤労大衆を支配し、あるいは指導するために、大衆の上あるいは外にあって、大衆を解放しようとしても決して成功することはない。誠実にそれを希望しているとしても、である。真の解放は、政治的党派あるいはイデオロギー組織の旗の下にではなく、結集した利害関係者自身の直接行動によってしか、そして大衆の上にではなくその中にあって働く革命家に、支配されるのでなく、援けをえた《自らによる管理》と具体的な行動とに支えられた、労働者自身の階級的組織、生産組合、工場委員会、協同組合の中でしか実施されないであろう。

ロシヤ革命の裏切られた経験から生れた、このヴォーリンの言葉は啓示的であり、理論的にはこの言葉によって前衛と大衆との問題は解決している、と思われる。しかし、実際に即して考えてみるとなかなか難しい問題が残されている。意識的な少数者に比べて、大衆が知識において、組織能力において、社会を変革しようとする意志において、水準が低い時、意識的な少数者が、どういう形で大衆を支配したり指導したりしないでいられるのか。どういう形で、大衆の自発的な能力を開拓し、どういう形で、大衆自身の活動による社会変革を援けることができるのか。言葉ではどのよ

うにいおうと、事実は指導ということにならないのか。そして、指導関係が温存されるとすれば支配関係も温存されることにならないのか。

ここには、革命が大衆自身の仕事であることを確認し、自分たちの役割の小さいことを望む意識的少数者が、大衆の活動能力の不足のために大きな役割を果さざるをえない、そして真の姿の革命はそこでは達成されない、という逆説的な関係が存在するように見える。が、五月革命の中で、少なくとも三月二十二日運動は、その難しい問題にある程度の解答を与えているように思われる。その解答は、二つに要約できる。

一つは、指導者意識を全く持たない、指導者意識を持つ権利があるなどとは全く考えないで行動すること、あるいは（あとで説明を加えるが）指導者意識など全く持てない精神構造の下に行動することである。三月二十二日運動のメンバーたちは、自分たちが大衆の中で意識的少数者であることを自認してはいたが、しかし同時に、あくまでも大衆の一員として行動した。彼らは、大衆の中で、自分たちは積極的に活動する大衆の一員である、と見なしていたわけで、大衆の上に立つものとはおよそ考えることはなかったのである。

もう一つは、三月二十二日運動のメンバーの、大衆に対する働きかけは、指導とか強制とかいった性質のものではなく、ただ自分たちが模範的な行動を示し、大衆の中から呼応する、内発的な意欲を引き出す、というのであった。

これらは表裏一体のものであって、第二のものは第一のものの必然的な帰結といえるが、第一の

もの、指導者意識は全く持たないということは、三月二十二日運動の指導原則と深くかかわっている。第二章ですでに紹介した、エピステモンがあげた三月二十二日運動の第二の指導原則は、《運動》が望み、到達するものをあらかじめいうことを可能とする、何らの知識も政策として持たないこと、であったが、これは重要なものであり、あらかじめどういうことをするのか、知ることを拒否しているのであるから、ある定められた方向への指導をはかる、指導がありえないのも当然であって、組織の行動は、置かれた状況の中での大衆討議を経て、そのあとで決定されたのである。

三月二十二日運動のメンバーは、知識について、既成の権威ある知識というものを否定した。誰か特定の人間が持っている知識を権威あるものとすることを否定した。誰もが学ばねばならない立場にいるのであって、知識は新たにこれから創りだされるものだと見なされていたのである。この教育に対する姿勢は、政治に対する姿勢においてもそのまま踏襲された。

誰か特定の人間が持っている政治上の教義を、権威あるものとして受け入れることは拒否された。何らかの、あらかじめ設定された教義を、組織として受け入れることは拒否された。そして、ごく基本的な原則に立脚している以外は、毎日毎日、新しい状況の中で、具体的に決定し、行動したのである。その基本的な原則としては九つがあげられていた。

一、革命的潮流の中の諸傾向の多様性、相違の承認。

一、責任者を解任しうることと、集団による力を有効に活かすこと。

一、思想の絶えざる交流と、情報と知識の独占に対する闘争。
一、階級化に対する闘争。
一、現実における仕事の区別の廃止、つまり、肉体労働と知的労働との間の仕切を打ち破ること。
一、風紀取締、国民投票、選挙協定、話合い、権力の委任……といった発想による瞞着の拒否。
一、経営者との対話の拒否。
一、一般的利益のための仲裁者である国家という神話の打破。
一、さしあたり自然発生的なものでしかないが、しかし革命的な可能性の一つとしてわれわれが説かなくてはならない行動の形態である、労働者自身による企業の管理。

以上九つが三月二十二日運動という組織体の基本的な行動原則であったが、これらの原則以外は、これという明確なプログラムを持たずに行動した。そして、建設のプログラムを持たずに行動した、ただ破壊だけに専念した、といってかなり非難を浴びたのだが、私はむしろプログラムを持たなかったという点にも、三月二十二日運動のユニークな、創造的な性格があった、と考える。私は革命のプログラムを否定するものではなく、できるだけ周到な、しかし絶対的なものではない、状況と照合しつつ絶えず修正しうるプログラムを欠くことができないと考えるものだが、あらゆる

既存の組織の革命性が疑われ、自分たちがかってない新しい状況にいると思われる時、五月革命を推進した青年たちは、自分たちの経験を重ねること以外に頼るものがなかったのであって、その場合、何らのプログラムを持たぬことは創造的な行為であった。そこには、五月革命の「単なる初まり」であることの反映がみられるが、あらかじめ枠をはめることは拒否されたわけで、そうすることによって、あらゆる可能性に対して開かれている創造性を持ち続けていたのであり、あらかじめ枠をはめるものはいなかったから、行動の決定に当っては徹底した大衆討議がとられたのである。

つまり、指導部というものを持たなかった、持とうともしなかった、組織についての決定権を誰か特定の人間に委任しようとは全くしなかったのであって、すべて徹底した大衆討議で決めた、というのが大きな特徴であった。そして、すべて徹底した大衆討議で決めた、ということによって、意識的少数者も全く大衆の一員として大衆の中に融合していたのである。三月二十二日運動の中にも知的なレベルの差はあった、と思われるし、意識的少数者という部分と大衆という部分はあった、と思われる。しかし、意識的少数者たちは、自分たちの意見が絶対的なものである、それが組織の意見にならなくてはならない、とは考えなかった。組織の意見は、全体の討議によって決定されるものだと考えていた。自分たちの意見は、討議を通じて、全体の納得、合意をえた上で、その範囲で、組織の意見となるものだと考えていたのである。そこでは、言葉の上だけではなく、現実に直接民主主義が貫かれていた。

われわれは、意識的少数者と大衆との間で――実際にはそうしたはっきりした区別があったわけではなく、むしろ、その時々にある問題について事情に通じているものと通じていないもの、といった方が実情に合っていたと思われるが――便宜上、意識的少数者と大衆という言葉を使えば、その両者の間では、ナンテールの社会学科の教室で行なわれていたのと同じことが行われていた、ともいいうる。ナンテールの社会学科では、教官は「クラスをエキスパートとして補佐する。教官は彼の知識を生徒たちの意向に委ねる。彼は内部の交流と紛争との調整を確保する」だけであったことは前章でのべたが、同じように意識的少数者の知識や経験は、いわば資料として、大衆討議の前にさらされる。そして大衆討議の結果、納得されれば採用される。しかし、あらかじめ権威あるものとしては、強制されてはいないし、また、それが権威を持つように雰囲気づくりが行われていたのでもなかった。ある特定の人間の意見は、それが納得された限りで、あるいは信頼された限りで、全体の意見として初めて採用されたのであって、それは大衆討議を繰り返したのちにであった。そして、そこでは、誰でもが自由にものが言える雰囲気にあった。これは重大なことであると思われる。

そこでは、ある指導路線に意識的に誘導しようとする態度は特に批判された、といわれている。あらかじめ存在していた教義に、自分たちの意見、自分たちの行動を委任してしまうのではなく、自分たちは何を望んでいるのかを絶えず確認しながら、そのためにはどうしたらいいのか、それを日々新たな状況の中で、大衆討議を通じて問い返していった、そうして行動を決定するという方法

がとられた。

そして、そういう風に、既成の教義を拒否し、問題を具体的な状況の中で考える、ということによって、三月二十二日運動は党派性を克服した。三月二十二日運動はアナキスト、トロツキスト、毛沢東主義者を含む雑多な集団であったが、しかし、行動の原則の第一に「革命的潮流の中の諸傾向の多様性、相違の承認」をあげて、思想的に異なるものの結集体でありながら、党派性を超克したのであり、その点にも、私は三月二十二日運動のユニークな先駆的な意義があった、と考えている。

そのことについて、三月二十二日運動が六八年四月にだした会報は「小党派の対立を越えて、作業が共同でなされた」ことを強調するとともに、次のようにのべている。

意見の対立がないわけではなかったが、それは教義を守るための小宗門内での言葉の争いではなく、現実との対決の場での、実践的、理論的な問題から生まれたものであって、特筆すべきことは、そこでは、科学的な分析の手段ではない、他党派をおとしいれようとする、硬直した認識、用語上の排他主義が徹底して批判すべきものとして扱われた事実である。

これは重要な、創造的な試みであった。つまり、左翼運動の中でよく見られる現象、打倒すべき対象との闘争よりも同じ戦列にあるべき党派間で争う、というバカげた現象を克服する試みであっ

た。党派間の争いというものはまず不毛なもので、多くの場合、空疎な言葉の争いに終わるのであるが、なぜ空疎な言葉の争いに終るかといえば、それは党派的人間の争いであるからであろう。

では、党派的人間とは何か。ある党派に属することで、自らの思考を停止させるという安易な道を選んだ人間であり、党派のイデオローグ、党派の指導部、あるいは党派が師とする思想家に考えることを委任してしまった人間であり、徒党として権力意志の充足を求めるようになった人間、党派が設立された本来の目的貫徹よりも党派そのものの維持拡大をいつしか願うことになってしまった人間であり、聖なるテキストの引用で現実を把握したかに思い込む人間であり、あらかじめ定められている結論を論証の形に組み直す人間であり、論証を新たに何かを見出すためにではなく、敵手に打撃を与えるために行なう人間であり、一言でいうなら教条的人間である。争いは必然的に不毛な観念的な空論の投げ合いか、感情的な悪罵の応酬に終わることとなる。

そうした党派的人間の最大の特徴は、自分の方が絶対的な知識を持っているという認識であるが、絶対的な知識を否定していた三月二十二日運動は、そんな党派的人間であることを拒否する場の上に成立していた。そして、誰かの意見を与えられることを拒絶し、自分たちの置かれた状況について、自分たちが貫徹すべき目的は何かを常に問い返し、とるべき行動について選択をしなければならないのは自分たち自身であることを確認しながら、その責任を自ら引き受け、問題を具体的に考えることで、党派的人間であることを拒否していたのであって、したがって、「科学的な分析の手段ではない、他の党派をおとしいれようとする硬直した認識、用語上の排他主義は、徹底して

批判されるものとして扱われた」のであった。

繰返していえば、そこにはあらかじめ存在する教義を拒否し、決定はすべて大衆討議を通じて直接民主主義的に行なってゆく、という三月二十二日運動の基本的な性格がみられる。そして、この基本的な性格は、多かれ少なかれ、五月革命の全面にみられた性格であった。大学で、路上で、工場で組織された夥しい討論のための集会、五月革命の過程で作られた数百に及ぶという行動委員会は、直接民主主義の学校という性格を帯びる。そして、ある方向に指導するのではなく、ある教義に従属させるのではなく、討論を通じて問題を明確にし、行動を決めてゆくという方式によって、社会の各面における、予想もできなかったさまざまの異議申立てを噴出させるという、革命的状況を生みだしてゆくこととなった。

そうした直接民主主義的な性格、いいかえれば、意識的少数者に決定を委任しないという性格は、五月革命の過程で生まれてきた、行動委員会と呼ばれる組織の型態にもはっきり反映している。行動委員会は、何かしようとした人たちが自発的に集まって作った組織であるが、十人から三十人位が望ましいとされていた。

それらの行動委員会を結集する動き、たとえば五月二十三日には百五十の行動委員会の会合が開かれはしたものの、連携はとることにされるが、各行動委員会の運動に一定の組織、一定の綱領を与えようとすることは避けられた。それは、自然発生的に生まれてきた、多様な行動を殺し、麻痺させかねないからであった。むしろ無限定であり、無秩序であることによって、自由な発言の機会

を与えることによって、そこから何らかの自立的組織への道とエネルギーが与えられるであろう、と考えられたためであった。そこでは、いうまでもなく、ある特定の教義、ある特定の意識的少数者の優位は否定されていた。

この意識的少数者の優位の否定、意識的少教者も大衆の一員にすぎず、決してそれ以上ではない、という点については、それと関連して、コーン＝ベンディットが注目すべき発言をしている。彼は、著書の『左翼急進主義』の中で、革命運動の基本的な原則として七つをあげているのだが、そのほとんどは先にあげた三月二十二日運動の行動原則と重復しているのに、一つだけ、七番目にかかげた次のものだけはほかには見られない、特異なものである。

献身や犠牲のような、ユダヤ＝キリスト教的誘惑を実践の中から追放すること。革命闘争は、みなが賭ける必要を感じた賭けでしかありえないことを理解すること。

ここでコーン＝ベンディットは、あらゆるものの絶対化を拒否すると同時に、革命それ自身の絶対化も拒否している。革命は賭けにすぎず、賭けのために献身や犠牲を要求するな、といっている。賭けは、賭けてみる気になったものがするものであって、絶対にやらなくてはならない、というものではない。やりたいものがやるだけであって、革命もそのように、やりたいものがやる賭け以上のものではない。そういうことによって、コーン＝ベンディットは、革命を崇高なもの、神格

化したものとすることを拒否している。革命運動というのは、ある支配体制の下で生きてゆくことを望まぬという個人的欲求を持ち、その体制を打破することに個人的な利益を見出した個人たちが、同じ利害関係に立つものの手をつないで行なう運動であり、それを推進してゆけばおそらくもっとのびのびと気持よく生きられる別の社会のあり方が見られるであろうという運動、つまりその運動を望んだ人々がする必要を感じた賭けなのである。あらゆる賭けと同様に、そうしたいからするだけのものにすぎない。それは、自分の利益を追求する運動、エゴを追求する運動である。人民に対する奉仕や正義のためという不遜な運動ではなく、侵害されている個人的な利益を、共同の力で奪還しようとする運動である。

しかし、とかく革命はそういうものとは考えられず、崇高なもの、神格化されたものと考えられがちであり、革命に献身すること、革命のための犠牲になることは尊ぶべき行為であって、それに反する行為は軽蔑すべきものだ、と考えられやすい。しかし、コーン・ベンディットはそうした考え方に反対する。革命を自分の個人的な利益の追求ではなく、何らかの献身の対象とする考え方に、彼は、革命に専心する人間たちを特別視させる、彼らに何らかの特権を与える危険を感じとっている。そして、革命を絶対視し、崇高な任務として使命観をもたせるような考え方に、彼は、特定のイデオロギー遂行のために多数の人々をかりたてようとする意図、特定の指導部の指揮下に大衆を動員し服従させるという意図、結局は支配関係を存続させる、権威主義的な倫理観を感じて、反対している。何かを絶対視することは、必らず神と司祭を認めることであり、必らず犠牲と差別

とを要求する。コーン＝ベンディットはそうした一切のものを拒否する。彼は、革命をやってもやらなくてもいいものだと考える。彼自身は、どうしてもやりたいと考える。しかし、やりたくないという人間を非難することはしない。彼は、革命をやりたいという人間もやりたくないという人間も等価に考える。革命をやりたくないという人間を、差別的に、軽蔑すべきものとは見ていない。

たとえば、彼は、五月革命の中で、結局は革命的な闘争に起き上ることのなかった賃金労働者たちについて、こういっている。

彼らの従順と隷属は非難さるべきではない。そんなことをしても何にもならない。慨嘆さるべきでもない。そうすれば一つの道義的な態度を作りだすことだから。

この反対の理由は注目していい。コーン＝ベンディットは、皆が従わねばならないような絶対的な道義的な態度を決めることに、反対しているのである。ここには、各個人の態度は各個人が決めるべきであるという考え方がみられる。彼は、革命に起ち上ることのない人間の立場も尊重しているのである。

しかし、それでは、彼らはそのまま放置しておくべきなのか。非難すべきでもなく、慨嘆すべきでもないとしたら、賃金労働者の従順と隷属は、放っておいていいのか。

コーン＝ベンディットはそうは思っていない。彼は、「意識的少数者の活動によって打破すべきである」と考える。意識的少数者の模範的行動によって、賃金労働者たちに、彼らも起ち上る力があること、別の生き方ができることを示し、彼らの自発的な要求を引きだし、その上で、ともに手を携えて闘おう、というのである。コーン＝ベンディットは、意識的少数者の活動をそんな風に考えることによって、指導を否定し、意識的少数者をあくまでも大衆の一員として見なしているのである。

そして、一般に知的水準が高くなってきている現在では、意識的少数者と大衆との知的レベルが極度に離れていた以前とは違って、そういう形での意識的少数者と大衆との関係が可能であると思われるし、またそうでなければ、現に多くの政治党派が排斥されているように、権威主義的、押しつけ的な態度として反撥される時代にわれわれはいるのである。

なお、意識的少数者の模範的行動について、それがどういうものでありうるのかは、具体的な事例の中で考えるべきものだと思うが、自己満足に終わるようなものではなくて、本当に大衆の心の中にひびいて、彼らを奮起させる、有効な、強力な起爆剤でなくてはならないことだけを、簡潔に指摘しておきたい。